

少数話者言語とインターネット



NPO 法人地球ことば村顧問 金子 亨

David Crystal が *New Edition UNICORN ENGLISH READING* の Lesson 6 *Changing English and the Internet* (pp.58-65) で述べているように、21 世紀に入ってからインターネットによるコミュニケーションがますます世界規模に拡大し、少数話者言語にたいしても確かにそれなりの影響を及ぼすようになってきました。

例えば、ネイティブ・アメリカンの公的組織ではきちんとしたホームページをもっているところが多く、伝統的な母語の教育を始めたところもあります。外からのアクセスも可能なところもあって、ついこの前までは考えられなかったような外部からのコミュニケーションがインターネットを通してできるようになりました。しかし、鎌田遵さんが報告しているように¹、北米先住民の状況はまだ決してよくありません。オバマ大統領を作りあげて少し change したアメリカでも、この人たちにはまだまだ世界的な支援と支持が必要です。日本からもアクセスして、その人たちを励まし、応援して、アメリカがきちんと「家賃を払う」ようにしたいものです。

カナダ領内の先住民もサイトをもっているグループがかなり多く、この人たちにもインターネットを通じて直接にアクセスができます。

中南米の先住民の場合にはそう簡単にはいきませんが、この数年でほとんどの南米諸国において、新しい動きが政治を大きく転換させることができましたので、各地で先住民団体が活動し始めました。この地域での共通語はさしあたりスペイン語で、これが歴史を引きずって共通語になっています。しかし、現地では、サイトを作るだけの金と技術がまだまだ足りません²。中南米の先住民からも世界に向けての直接の情報発信が是非欲しい、そのために北米のネイティブ・アメリカンのように頑張りたいと思います。

とは言っても、南北アメリカはまだずっといいのです。世界の他の地域を見渡すと、インターネットどころではないところが圧倒的です。グローバル資本主義はこの面でも弱者の切り捨てをしてきたのです。東アジアの山奥へ入ってごらんさない。南太平洋の島々をたずねてごらんさない。旧ソ連地域の先住民のこと

を考えてみましょう。アフリカの小さな部族が毎日どんな暮らしをしているかを想像してみてください。サイトを作るどころか、「電気が来っていない」「パンが買えない」「虐殺が怖い」…。そういうところで、どうして Crystal 先生のおっしゃるように英語でホームページを作るなどと贅沢で悠長なことを言われていますか！

ここ日本のように多少カネと技のあるところは確かに恵まれた地域のようにです。日本の先住民アイヌは今や全国に何万人も住んでいます。そして国の機関「アイヌ文化振興・研究推進機構」、札幌の「北海道立アイヌ文化研究所センター」、白老の「アイヌ民族博物館」、都内に事務所をおく劇団「アイヌ・レブルズ (Ainu Rebels)」³、二風谷の「アイヌ語放送 FM ピパウシ」など多くの優れた団体が活動していて、それぞれにサイトをもっています。これらのサイトにはどれも日本語でアクセスでき、Google にも日本語で出ています。サイトの言語はもちろん日本語です。

また北海道のちょっと先のロシア領、樺太島北部とアムール川河口地域には古くからニヴフ（人間という意味）と呼ばれる人たちが住んでいます。総勢 4 千人。この人たちの使うニヴフ語は、典型的に日本語にいちばん近いけれども、世界のどこの言語とも系統関係が知られていません。しかし優れた民族学者、文学者、言語学者、工芸家、博物館学芸員など知識人・芸術家が人口比にしてやたらにたくさんいる少数民族です。それなのに今は伝統の母語を話せる老人が 10 人いるのでしょうか。ニヴフはまだ民族サイトを持っていません。でも月刊新聞があります。それがやっとなのです。共通語は侵略者のごとびであるロシア語です。英語は第 1 外国語ですが、大正時代の日本ほどにもできません。それでも Windows XP ロシア語版で HP を作ろうかなと話し合っている人たちがいます。サイトができたなら、その言葉は多分ロシア語になるでしょう。

英語でアクセスできる先住民のサイトは世界を見渡すとそう多くはありません。Crystal 先生は世界の先住民のサイトを探す際、英語で検索をかけたために、英語のサイトしか見つからなかったのではないでしょう。それで先住民の団体がたくさん英語のサ

イトをもっていると思ってしまったのでしょう。つまり、英語眼鏡が世界を狭めたわけです。しかしこの病を治すには眼鏡を交換すればいいだけです。多言語眼鏡をお奨めします。

先住民の多くは生活上いくつかの言語が身につけてしまっていて、多言語使用の世界に住んでいます。多言語世界では、多くの場合どの言語を使うかは個々の話し手や話し手の集団の決意にかかっています。時にはそれは血まみれの決断です。多言語状態をその地域の事情に合わせて長く維持しつづけるのは決して易しくありません。

ユカギールという先住民がいます。レナ川から東のヤクート共和国に住んでいます。彼らは母語であるユカギール語、地域言語のヤクート語、ロシア連邦の国語であるロシア語を使いますが、現在、伝統の母語がほとんど消えかけています。この人たちは学校で英語を勉強しますが、これは学校のお勉強どまりです。彼らの多言語状態ではロシア語が優勢です。コンピュータが急速に普及してもしばらくはこの状態が続くでしょう。このような地域は世界の他の場所でも多く見られます。多言語状態が英語に優勢に働くとするのはやはり英語眼鏡をかけているためでしょう。

コンピュータ用語は機械語みたいなものです。パソコンができて英語がうまくなるわけではないのです。インターネットを使って多少英語がうまくなっても、昔のペン・パルみたいなもので、現地でおよばれに上がったときには何も「聞けない」、「喋れない」で

すっかり落ち込んでしまったという始末になるのが落ちです。David Crystalは、「Netspeakで英語が変わっちゃうかもしれない」と書いていますが、そんなことは国立英語研究所かなにかが心配すれば済むことで、日常に英語を使っている人たちにとってはどうでもいいことでしょう。

グローバリゼーションの波に乗って英語が世界を支配するかも知れない、そのためにあちこちの地域で言語が潰れてしまうかも知れないと心配する人がいます。しかし、言語が消滅するのは人がそれを殺すからです。歴史的にみると、典型的な事例として軍事占領と植民地化がその主な原因です。これからはもうそれをしない・させないという決意が、ガザを含めて、それぞれの地域で、そして世界中で実現されることが肝心です。また、平穏な地域でも言語と民族による差別はもう存在してはなりません。それは職業選択の場にもちこまれると、きまって差別と貧困を作り出します。インターネットの英語がそのように使われることのないように、互いの民族と言語とを尊敬しあう多言語社会を作り、長く維持することを心から願います。

注1：鎌田遵『ネイティブ・アメリカン』岩波新書 1172 (2009.01)

注2：ラテン・アメリカ協会に部分的ですがLink集があります。http://www.parc-jp.org/や細川弘明さんのHPも参考になります。

